

それは日本製の「洋剣」なのか？

滋賀県甲賀市の神社に伝わる一振りみなぐちの長剣、水口レイピア。

美術史・理化学・文献史の研究者が多角的な視点から、

東洋と西洋が交差した大航海時代に誕生した比類なき伝世品の実像に迫る。



加藤嘉明画像（藤栄神社像）

伝世洋剣

水口レイピアの謎に挑む

小林公治編

（東京文化財研究所特任研究員）

各界気鋭の研究者が集結。洋剣の謎に迫る！

小林公治（東京文化財研究所特任研究員）：物質文化史、対外文化交流史

伊藤誠之（甲賀市教育委員会歴史文化財課）：日本近世史

永井晃子（甲賀市水口歴史民俗資料館）：文化財学

池田素子（京都国立博物館）：文化財保存科学

鳥越俊彦（東京国立博物館）：保存科学

末兼俊彦（京都国立博物館）：日本金工史

原田一敏（ふくやま美術館）：日本工芸史・刀剣史

末次由紀恵（栗東市スポーツ協会文化財調査課）：考古学

Pierre Terjanian（メトロポリタン美術館）：西洋武器具史

Ulrike Körber（リスボン新大学）：工芸文化交流史

（掲載順）

A5判上製カバー装 二〇二三年三月刊

本文三九二頁 図版一六頁

ISBN 978-4-8055-0970-8 C3021

定価五、五〇〇円

（本体五、〇〇〇＋税一〇％）

さまざまな専門的見地から「水口レイピア」が提起する謎に挑む

目次

プロローグ 「水口レイピア」研究事始め
—この研究が始まった経緯—

第一部 実像と伝世

第一章 藤栄神社に伝わる洋剣と加藤嘉明（伊藤誠之はじめに）
 (一) 藤栄神社の刀剣二つ
 (二) 加藤嘉明という人物
 (三) 加藤家の刀剣
 おわりに

第二章 十字形洋剣から「水口レイピア」へ
 —戦後から現在までの経緯と概要—（永井晃子）
 (一) 十字形洋剣の銃砲刀剣類登録（昭和二十年）
 (二) 水口町志編さん事業（昭和三十年代）
 (三) 文化庁による文化財集中地区特別調査（昭和四十年代）
 (四) 水口町立歴史民俗資料館への寄託（昭和五十年代から六十年代）
 (五) 水口城資料館における展示以降（平成三年から現在まで）
 (六) 水口レイピアの外観と特徴

第二部 調査と分析

第三章 柄と鎧鉢金具
 (一) 柄の素材とネジ留め構造の発見（池田素子・鳥越俊行）
 (二) 製作工人の推定（末兼俊彦）
 (三) CTデータによる柄部分の3D模型製作とその活用（鳥越俊行）

第四章 剣身
 (一) 水口レイピアの剣身（原田一敏）
 (二) 刃部幾何学文の謎（末次由紀恵）
 (三) 剣身の柄への組み込み構造とその素材（池田素子・鳥越俊行）

第五章 鞘
 (一) 洋剣の漆塗鞘（池田素子）
 (二) 日本の鞘から見る水口レイピアの鞘（末兼俊彦）

第六章 ヨーロッパ製レイピアと水口レイピア
 —製作地と時期—（E.エル・テルジャン）

はじめに
 (一) ヨーロッパ製のレイピアとは
 (二) 水口レイピアの記載
 (三) 検討

第七章 水口レイピアはどのような手順で造られたのか
 —製作工程の復元と製作者の検討—（小林公治）

結論
 (一) 前提となる考え方
 (二) 剣身と柄との関係性
 (三) 十七世紀前半の日本におけるネジの位置
 (四) 剣身、鞘の製作工程と手順
 (五) 柄の製作手順と剣身への組み込み工程、柄製作者の推定
 (六) 製作者、全体工程を統括管理したのは誰なのか

第三部 歴史

第八章 レイピアはいつ、どのように日本にもたらされたのか
 —十六世紀末から十七世紀初めの史資料に見える洋剣—（小林公治）
 はじめに ヨーロッパ製レイピアはどのようにして日本人の手に渡ったのか
 (一) 天正遣欧少年使節に贈られたヨーロッパの剣
 (二) 天正遣欧少年使節が持ち帰った長剣の行方
 (三) スペインからもたらされたレイピア、描かれたレイピア、出土したレイピア
 (四) ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号（マドレ・デウス号）事件
 (五) 一六〇九年（慶長十四）のスペイン船サン・フランシスコ号 遭難を契機とするスペインと伊達政宗の関係
 (六) 「二 なんばん人の剣 七腰」
 (七) イギリス商館長リチャード・コックスが伝える 日本国内でのレイピア
 (八) 一六二〇年代末から三〇年代初めにかけてのオランダとの関係
 (九) ポルトガル・スペイン側によるタイでの朱印船攻撃と日本人船員の連行に起因する外交関係修復の試み
 (十) 暹羅（タイ）国からの剣の方物について
 おわりに

第九章 加藤嘉明の人間関係
 —水口レイピアは誰が命じ、誰が製作したのか—（永井晃子）
 (一) 加藤嘉明とその主君
 (二) 嘉明と同時代を生きた武将・公家
 (三) 伊予のキリシタンと嘉明
 (四) 嘉明の家族
 (五) 婚姻関係による縁戚
 (六) 本阿弥家とその周辺
 (七) 水口レイピア製作当時の背景
 おわりに

第十章 双頭鷲文様
 —このモチーフは水口レイピアの由来、発注者、そして所有者を探る糸口となるのか—（ウルリケ・ケルバー）
 はじめに
 (一) 鷲および双頭鷲シンボルの長期的なあり様
 (二) キリスト教帝国のシンボルとして
 (三) インドにおける双頭の鳥文様
 まとめ
 エピソード 水口レイピアが語る意味、残された謎（小林公治）
 各章の総括
 水口レイピアとは
 本書の締めくくりにあたって

引用参考文献
 図版出典一覧
 執筆者一覧



～美術史・建築史分野で普遍性のあるテーマを専門性を担保しつつ、専門家と読者を架橋する～
『芸術選書』刊行スタート！

鑑定学への招待
 「偽」の実態と「観察」による判別
 杉本欣久（東北大学准教授） 著
 定価 3,520 円（本体価 3,200 円＋税 10%）
 「真」か「偽」か—
 美術史研究の世界でタブー視されてきた、
 美術作品をめぐる「鑑定」の入門書。
 観るべきポイントを丁寧に解説。
 四六判上製カバー装 本文 214 頁 口絵 8 頁
 2023 年 3 月刊 ISBN 978-4-8055-1501-3



明治浮世絵師列伝
 菅原真弓（大阪公立大学教授） 著
 定価 3,850 円（本体価 3,500 円＋税 10%）
 江戸から明治へ—
 浮世絵が過去のものとなりゆく時代を
 生きた「最後の浮世絵師」たち。
 その百花繚乱の姿。
 四六判上製カバー装 本文 266 頁 口絵 8 頁
 2023 年 3 月刊 ISBN 978-4-8055-1502-0



中央公論美術出版
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-10-1
 IVYビル6F
 Tel: 03-5577-4797 Fax: 03-5577-4798

お取り扱いは